台湾の日本語学習者の学習リソース利用
ーインタビュー調査からー

工藤　節子(東海大学)

1. はじめに

学習者をとりまく環境は時代とともに変化してきている。教室の中だけではなく，教室の外にどのような学習環境があり，学習者はこれをどのように利用しているのだろうか。そこで台湾の日本語学習者の用いる学習リソースについてインタビュー調査を行った。学習リソースの調査は，学習のプロセスを明らかにすることにつながり，今後の教育，学習支援を考えていく上で意義がある。本稿における日本語学習者とは，教室，教室外を問わず，なんらかの形で日本語を学んでいる高校生，大学生，社会人を指すが，この他に今回同時にインタビューを行った植民地統治時代に日本語教育を受けた人々(今回の調査では年長者と呼ぶ)[1]，日本人との国際結婚の家庭の子供たち(年少者と呼ぶ。今回の調査では保護者にインタビュー)[2]の調査結果も合わせて分析する。これら二つのグループ[3]を加えた五つのグループの学習者が，それぞれどのような学習リソースを，どのように利用しているのかを分析し，今後の教育，学習支援で何が求められるかを探る。

2. 本稿における学習リソースの定義

田中・斉藤(1993)によれば，学習とは環境との相互作用で，相手に働きかけ，そのことによって相手も自分も変わっていくことであり，学習リソースとは，学習に関する相互作用の対象となるものである。例えば，田中・斉藤が例に挙げているのは，以下のような例である。「ある学習者が教師に質問をして適切に答えたとしたら，そこに学習は成立しているのであり，その教師は学習リソースと言える。また，ある学習者が本に書いてあることに疑問を抱き，著者に質問の手紙を書いたとして，それを日本語で書いたとしたら日本語の学習となる」わけで，その本も著者も学習リソースとなる[4]。田中・斉藤はこのように学習リソースを定義し，人，モノ，社会的リソースの三つに分けている。このうち，社会的リソースというのは，物的，人的リソースが組み込まれたコミュニティ，ネットワークを指す。トムソン木下(1997)は，これら三つの分類以外に，日本関係の情報を得る情報サービスリソースを挙げているが，本稿では，情報が何を介してアクセスされるかによって，それぞれ人，モノ，場のリソース[5]にふり分けることにする。

ただし，本稿ではリソースを日本人や日本語で書かれたものに限定しない。トムソン木下(前掲)は，人的リソースを日本人と限定する立場をとっておらず，オーストラリアに移住している年配の韓国系，台湾系の日本語話者をはじめ，流暢な日本語を話す外国人話者，同級生[6]も人的リソースに入れているが，本稿でも人的リソースを日本人ネイティブスピーカーに限定しない。また物的リソースに関して，田中・斉藤，トムソン木下には，日本語で書かれていないもの，例えば翻訳された日本の小説や漫画を物的リソースとみなす記述が見られないが，本稿ではこれらも物的リソースとみなす。翻訳されたものは日本語のインプットにはならないが，日本の社会文化を理解する重要なリソースと位置づけることがで

きるからである。ネウストプニー(1995)は，日本語教育の目標を，日本と外国との理解，相互行動[7]としており，言語能力だけではなく社会文化能力[8]も必要だと述べている。とりわけ海外において日常的に日本語を使用する機会は限られ，かわりに翻訳された作品やメディアを介した情報に接する機会が多い。こうした環境では日本語が理解できなくても一学習者の視点から日本の社会文化を理解することが可能である。むろん，社会文化理解の程度は人によって異なり，これらの理解もその後の学習を経てさらなる変化を遂げる可能性はあるものの，それぞれがある段階における個々の学習の諸相を表していることに変わりはない。本稿では，さまざまな学習者がその人らしい自己実現をするのに必要とされる日本語習得，日本の社会文化理解のために相互作用をする対象としての環境を学習リソースととらえることにする。

3. 学習リソースと社会文化的背景

学習リソースは社会文化的背景を持っている。林(1998)は第二言語学習にかかわる要因として社会文化的要因，学習者要因，学習環境要因を挙げ，社会文化的要因が，学習者要因，学習環境要因に影響を与えていることを述べている。本稿で論じる学習リソースは，授業，授業外に関わらず日本語学習に影響を与える人やモノ，場であり，林(前掲)では学習環境要因に相当するが，こうした学習環境要因は，学習者をとりまく社会の言語政策，多言語，多文化との接触・態度・期待といった社会文化的要因の影響を強く受けている。例えば，外国語学習が奨励されているかどうか，日本語がその社会においてどのような位置づけをもっているか，日本とどのような政治経済的な関係をもっているかによって学習リソースのあり方は大きく変わってくる。劉・王(2002)によれば，台湾では50年の植民地統治により日本語習得率が非常に高く，こうした親や親戚の影響で日本語を学習するケースも非常に多いと言う。また日本への訪問経験やビジネスの影響など，日本との人的交流，ケーブルテレビの普及により日本関連情報の量は中国と比べるとはるかに多く，日本語の有用性に対する評価も高いと言われている。台湾は1895年から1945年まで日本の植民地支配を受け，日本語の強制に対して大きな衝突や反抗[9]があったものの，1944年には71パーセントの台湾人が日本語を理解するようになったと言われている[10]。戦後蒋介石による国民党政府が入ってきてからは日本語が禁止され，新しい国語としての北京語の教育が始まるが，「2.28事件」[11]に対する反動，国民党政府に対する不満もあり，生活の場では日本語を使用する人々が多かったと言う。こうした背景から，この世代の人々の中には，今でも日本に親しみを持って流暢な日本語を話す人たちがいる[12]。

一方，日台の活発な経済交流が日本人やモノとの接触機会を生み出しているという状況もある。台湾の2001年上半期の貿易額で，日本は輸入額の1位，輸出額で3位を占めており[13]，また統計の国籍別統計によれば[14]，観光やその他の滞在で台湾を訪れる日本人の数は最も多い。2003年はSARSの影響で落ち込んだものの，2004年には885,168人，2005年11月の時点で既に100万人を超えるなど[15]台湾を訪れる日本人の数は年々増えている。こうした社会文化的背景から，日本語学習に影響を与える人，モノ，場のリソースに接する機会は台湾において非常に多いことが予想される。

4. 学習リソースとの接触がもたらすもの

では，このような学習リソースとの接触はどのような相互作用を生み出しているのだろうか。トムソン木下(前掲)は，学習リソースとの接触が目標言語話者との社交機会を与え，言語習得に必要な，文脈ある理解可能なインプット，アウトプットを与えるだけではなく，文化理解，多様な日本語との接触，言語使用を通しての自己評価の機会，さらには相互交流のネットワーク作りにも貢献していると述べている。また，浜田(2004)は，「日本語学習者と環境との相互作用に関する研究」の中で，学習者の学習環境[16]との相互作用の結果，学習につながるさまざまな学習行動やアイデンティティの再構築，日本語学習の目的をはじめ，相互作用の評価，計画など学習認知の機会が生まれていると述べている。一方，佐伯(1995a)は，学習をアイデンティティの変化を経た文化的実践ととらえているが，こうした見方に従えば，日本に関係する事や日本語を使って何らかの活動を行う文化的実践に好奇心や興味を示す，或いは参加を希望して何らかの働きかけを行うのは，一人の人間におけるアイデンティティ変化の表れであり[17]，学習行動の始まりと見ることができる。台湾の場合，娯楽として字幕つきの日本のドラマや翻訳された漫画を読む人は多いが，そこから日本の社会文化に興味をもつようになり，日本語学習に発展するという例も少なくない。このような場合，リソースとの接触は好奇心，関心，動機を生み出していると言える。この他，ドラマやニュースを通して日本事情としての文化[18]を理解することも可能であり，メールは日本語使用を可能にする[19]。言語使用の機会が広がれば，人間関係が生まれ，自身の言語能力について自己評価をする機会も生まれるはずである。

以上をまとめると，学習リソースとの接触は，言語インプット，アウトプットの機会を産出するだけではなく，社会文化理解，自己評価，学習評価，好奇心，学習動機を生み出す機会，さらには相互交流のネットワークを形成する可能性をもっている。本稿では，学習者の事例から学習リソースとの接触について述べるが，リソースとの相互作用を以下の項目から分析する。

a. 好奇心，興味，関心，学習動機の産出
b. 日本のモノ，人，コトについての情報，社会文化理解
c. 文字，単語，文法理解，日本語全般の学習[20]
d. 聴解，読解など受容技能の練習になる行為[21]
e. 言語使用，通訳，日本語を手段として使う行動
f. 能力，理解についての評価，自己評価，学習方法への気づき・評価
g. 好き，楽しいから行う行為，趣味，娯楽[22]
h. 人との出会い，交流，ネットワークの構築

5. 学習リソースとの接触

次に学習者グループ別に学習者の事例をとりあげ，リソースとの接触について述べる[23]。インタビューでは，日本語学習の目的と開始時期，日本語や日本に関連する情報，日本人との接触状況など学習環境全般，またその評価を聞いた。その中で，何が学習に貢献しているか具体的に述べている学習者もいれば，そうではない学習者もいたが，以下の記述は

そうした言明も含め，インタビューの内容を極力変えないように筆者が再構成したものである[24]。尚，(　　)内の記述は，リソースとの相互作用を4のa～hの項目に従って分類したものである。

5.1. 高校生

5.1.1. Aさん(女)(普通高校[25]2年生　インタビュー(中国語) 2004年7月)

人	物	場
兄，教師	ゲーム，攻略本(翻訳)，漫画， インターネット(サイト) テレビ(アニメ)，羊羹	第二外国語の授業

ゲームや漫画を翻訳に頼らず直接日本語で理解できるようになりたくて(a. 学習動機)，第二外国語の日本語の授業を履修した。小学校の頃，兄がゲームをやるのを見ていっしょにやるようになった。ゲームは全て日本語だったが，その中の漢字を見て類推し攻略本(翻訳)と対照させながら(d. 読解)ゲームをした(g. 趣味・娯楽)。ゲームの主題歌やゲームの中で展開される音楽も好きだ(a. 興味)。どうしてもほしい歌は少し高くつくが，漫画の店で日本から数回とりよせたこともある。ゲームをやりながら音楽を聞いていると臨場感がある(g. 趣味・娯楽)。ゲームの中で使われる名前はカタカタが多いため，カタカナにはなじみがあり，高校に入ってからの第二外国語の授業でカタカナを覚えるのはひらがなより簡単だった(c. 文字学習)。漫画も好きで読む。一番早く読んだのは「ドラえもん」で，これも最初は兄が読んでいたものだ。漫画は翻訳されていたが，擬声語の部分は日本語のままになっていて，これが日本語の文字だと気づいた(a. 好奇心)。その後インターネットで新しい漫画を探すようになった。日本語の新しい漫画がそのまま読めるところもあるが(d. 読解)，漫画の翻訳は中国のサイトに多いのでよく中国のサイトへいく。彼らは自分で翻訳してホームページにのせて皆で読みあう同好会のようなものをやっていて，漫画の評価もこうしたところで読むことがある(b. 社会文化理解)。最近は日本語を勉強して日本語が入力できるようになったので，時々日本のサイトにもいく。日本のサイトは，日本語が全て読めなくても写真やその他の情報を見て内容を類推することができる(d. 読解)。漫画やアニメから日本の文化を理解することができる。例えば，「ちびまるこ」のアニメを見ていると，食卓にたくさんの皿が並んでいて台湾と違うので，授業の時先生に聞いたら(a. 好奇心)，日本では本当にそうするのだと聞き，食事文化の違いを感じた(b. 社会文化理解)。また同じく「ちびまるこ」で羊羹が高級品だと言っているのを聞いた(b. 社会文化理解)。羊羹がどんなものかわからなかったが，この前スーパーでたまたま羊羹を売っていたので食べてみた。15元(日本円約50円に相当)だから，日本のものかどうかわからないが，包装紙には日本語が書いてあった(c. 文字認識)。

5.1.2. Bさん(女)(普通高校2年生　インタビュー(中国語) 2004年7月)

人	物	場
母，祖父，姉，クラスメート	教科書，テープ，漫画，小説(翻訳)インターネット(サイト，歌)辞書，CD(ドラマ)，テレビ(ニュース)，新聞，和服	ラジオの日本語講座

祖父が日本語を話すのを聞きながら，自分でも少し勉強するようになった。しかし本格的に勉強したのは中学になって漫画の好きな姉と漫画(翻訳)を読むようになってからだ。漫画が好きな姉につきあって昔母が使った教科書とテープで50音や簡単な短い文を26課まで勉強した(a. 学習動機)。わからないところは姉に聞いたり辞書を引いたりする(c. 単語学習)。姉は大学生で日本語が必修なので今日本語を勉強している。たまに姉と二人で両親に秘密の話をする時に日本語で話すことがある(e. 日本語使用)。時々姉が買った小説(川端康成など)の翻訳を読むが，おもしろい(a. 興味)。ラジオで英語の勉強をしていた時に少し早めにラジオのスィッチを入れたら，偶然日本語の講座をやっているのを知ったので，それから時々聞くようになった(c. 日本語学習)。コンピューターはよく利用する。今は好きな夏川りみのサイトへいく。歌を聴いたり歌詞の翻訳を読んだりする(g. 趣味・娯楽)。夏川りみの歌は方言があるので，翻訳をみないとわからない(b. 社会文化理解)。一度学校のクラブ活動で宗教関係のことを調べることになってインターネットを探している時に，日本留学経験者が作成した京都を紹介するホームページを発見した。鳥居のマークがあったので宗教関係のサイトかと思ったが，京都に関係するサイトだった(b. 社会文化理解)。ここには日本のいろいろなサイトへのリンクもあるのでその後もよく利用する。翻訳サイトも時々利用するが質はよくない。日本語が少しできるので，時々クラスメートが漫画を持ってきて意味を教えてくれと頼まれることがある。解説する(c. 日本語解説)際，わからない言葉があると辞書をひく(c. 単語学習)。漫画をドラマ化したCDを聞くこともある。CDは漫画の専門店においてある。文字がないから一生懸命聞き(d. 聴解)，声優の真似をしてみたりもする(c. 会話練習)。日本の小説や文化に興味があるので，日本語をもっと勉強したい。今は第二外国語でフランス語を勉強しているが，将来大学に入ったら日本語を勉強したい。日本の文化に興味をもつようになったのは，小さい頃，祖父の影響で母が着ていた和服とか，インターネットでよくいく日本関係のサイトに興味をもったからだ。日本の精緻な文化，礼儀正しさが好きだ。華道も勉強したい(a. 興味)。もちろん，日本についてマイナス情報がないわけではない。例えば，新聞やニュースで，日本の生活が緊張している，部屋が小さい，援助交際といったマイナスの情報が入ってくることもあるが(b. 社会文化理解)，やっぱり一度は行ってみたい。

5.2. 大学生

5.2.1. Cさん(男)(生命科学専攻4年生　インタビュー(中国語) 2004年7月)

人	物	場
(祖父母), 両親, 父の仕事のパートナーである日本人, 観光ガイドをやっている友人, 教師	漫画(翻訳), 漫画(翻訳なし) テレビ(字幕つき), 日本の製品, NHK天気予報(字幕なし), 日本語の歌	日本への旅行, カラオケ, 第二外国語の授業

日本語の勉強を始めたのは大学1年生の時で, 第二外国語として2単位, 3年生の時も2単位履修した。子供の頃から日本の漫画(翻訳)が好きだったこと, 父が日本人との共同出資でビジネスをしている関係で, その日本人と会う機会があり, 日本語に興味をもつようになったこと(a. 興味), 父が日本語が流暢であったこと, 外国語を勉強することは世界が広がることだという母親の外国語学習の勧めもあって, 日本語を学ぶことにした(a. 学習動機)。漫画が好きで, かわぐちかいじが書いたものや『沈黙の艦隊』など, ビジネス, スポーツ, 政治, 医学界をテーマにした日本の漫画(翻訳)をたくさん読んだ(g. 趣味・娯楽)。漫画が好きになったのは, その中に日本の社会問題, 文化が描かれているからだ(a. 興味)。例えば,『島耕作』を読むと本当に会社の成長を見ているようでリアリティがあるし日本のサラリーマンがもつプレッシャーを理解できる(b. 社会文化理解)。留学経験のある, 現在観光ガイドの仕事をやっている知り合いの話によれば, 日本人は自分でお金を払ってでもやるべき仕事を成し遂げる責任感をもっているという(b. 社会文化理解)。台湾にはこうした観念がないと感じている。日本の製品(例:MDプレーヤー, 象印の魔法瓶)は品質がよく安いしデザインもよく, 日本の完璧さを求める精神には感心することが多い(b. 社会文化理解)。日本へは5, 6回旅行をしたことがある。これまで東京が多かったが, 今度は伝統文化に触れられる京都に行ってみたい(b. 社会文化理解)。日本へ行った時に本屋へ行って翻訳されていない本物の漫画を読んでみたが, 辞書がないと歯がたたないし, 実際の会話も難しいと感じた(f. 自己評価)。テレビではよく字幕のある日本の番組を見るが(g. 趣味・娯楽), 授業でNHKの天気予報を聞いた時, 字幕がなくスピードも速いのできつかった(f. 自己評価)。歌手ではMr. Childrenが好きで, 時々CDを聴く。森山直太朗の歌は歌詞がわりと簡単だと思う(c. 日本語理解)が, だいたいメロディを聴くことが多い(g. 娯楽・趣味)。カラオケでは聞くことが多いが, 単語を覚えることもできるので時々歌う(c. 単語学習)。台湾は日本語学習の環境が豊富なほうだが, まだまだ完璧な環境とは言えない。日本語の授業はあるが, いざ知り合いの日本人と話す時は, 勇気がなくて話せない(f. 自己評価)。

5.2.2. Dさん(男)(日本語学科3年生　インタビュー(日本語) 2005年9月)

人	物	場
友達(日本からの帰国子女),大学のクラスメート,姉妹校の日本人大学生, TA	テレビ(アニメ,ドラマ),辞書,教科書, インターネット(情報検索,新聞,ニュース,掲示板,チャット)図書館の本, 紀伊国屋で買った本	塾, 第二外国語の授業, 日本語学科の授業, 日本への旅行, 姉妹校との交流, イベントの劇, 図書館, 日系デパート,

初めて日本語に接したのは小学校の時だ。小学校で日本から帰ってきた帰国子女の友人が話す日本語を聞いて意味はわからないが, 好奇心をもった(a. 好奇心)。テレビでは, 中国語の吹きかえの日本のアニメを見ていたが, テーマ曲が日本語で歌われていて, これが日本語なのだと知った。家族で一週間北海道と東京を旅行したことがあるが, 日本はきれいなところだと思った(b. 社会文化理解)。高校の時, 第二外国語の授業をとったが 50 音しか勉強しなかったため(c. 文字学習)物足りず, 夏休みに塾に行った(c. 日本語学習)。その後帰国子女の友達から日本のことを聞いていて(b. 社会文化理解), 日本語に興味を持ち日本語学科に入った。先生が厳しく自分の発音を録音して提出する課題があったので, CD を使って何回もアクセントの練習をした(c. 発音練習)。また会話の授業では教科書の会話の文型を使って会話を練習したり劇のシナリオを書いて発表して文型と単語が自然に身についた(c. 日本語学習)。学科の先生たちと話す時は, 基本的に日本語で話す(e. 日本語使用)。クラスメートとも簡単な単語を使って日本語を話すことがある(e. 日本語使用)。時々日本語について聞かれることがあり, わからない時もあり辞書を引いて教えることもある(c. 単語学習)。読解の授業で自分の読んだ文章を紹介する必要があり, 1 回目は好きな料理関係の本を図書館で探し(d. 読解), 2 回目は紀伊國屋書店で「外国人がよくする Q&A」を買って(d. 読解)発表した。発表の準備でわからないところは TA[26]に教えてもらった(c. 日本語理解)。家の近くに高島屋デパートがあり, 本屋に時々足を運んで日本語の本を見たり(d. 読解)日本料理を食べたりする。日本の食べ物は台湾の食べ物に比べると味がデリケートだと思う(b. 社会文化理解)。2 年生の終わりに学科のイベントで吉本喜劇の脚本をもとに劇をやって(e. 日本語使用)喝采を受け, うれしかった(f. 自己評価)。インターネットは, 授業の宿題の新聞記事や資料を探したり(d. 読解)音声付のニュースを聞いたりする(d. 聴解)。交流プログラムで姉妹校の学生たちが大学にきて, いっしょに実習をやった(e. 日本語使用)。実習に来る前に掲示板を通じて連絡し合い, 帰国後は個人的にチャットを通じて交流を続けている(e. 日本語使用), (h. 交流)。日本の大学生たちと日本語で話していると, 授業で習った日本語と大きな違いがあると実感した(c. 言語変種[27]理解)。クラスメートや学科の先生との会話は, あまり問題がないが, 日本の大学生たちと話をしていると半分ぐらいしかわからないことがあり, 不安になることもあった(f. 自己評価)。この活動は, 一週間の実習を通した共同生活でいっしょに授業を考えるため, 日本語を教える勉強になるし会話力も向上するので(f. 学習方法評価), 昨年に引き続き参加した。

5.3. 社会人

5.3.1. Eさん(男)(公務員　インタビュー(中国語) 2005年9月)

人	物	場
塾・大学院の教師，家庭教師，日本人教師，日本人の知り合い，同僚，先輩，日本人観光客	教科書，テープ，日中辞典，日本語能力試験，問題集，テレビ(ドラマ)，インターネット(NHKニュース，辞書)国語辞典，CD，VCD	大学院の授業，塾，日本での研修，政府の留学試験

本格的に日本語学習を始めたのは 1992 年である。在職のまま大学院に学ぶ機会があり，修士論文を書く時外国語の文献を読めるようにと勉強を始めた(a. 学習動機)。日本語は大学の第二外国語の授業で勉強したことがあるが，特別な動機もなく授業で教える内容も少なかったので既習はゼロに等しかった(f. 自己評価)。大学院では授業以外に，自分で文法の本を買い塾にも行くようになった。そこは法律関係の文章を読むための文型を教える塾だった(c. 読解技能の学習)。2 年生になると日本語のニュースの授業があった。その授業にはテープとテキストがあり，1 回で 5 課ぐらい進むので家で 20 回も聞いて発音に慣れるようにした(c. 聴解技能のための学習)。法学日本語という読解の授業もあった(c. 読解技能のための学習)が，これも 1 年生の基礎文法から比べるととても難しかった(f. 自己評価)。授業についていくためには自分で勉強するしかない(f. 学習方法評価)。大学院を卒業する年に日本語能力試験 2 級を受けたが 4 点差で合格できなかった(f. 日本語能力評価)。卒業後は 1 級，2 級の試験問題集や文法の本を買って自分で勉強し(c. 日本語学習)，2 年目に 2 級，3 年目に 1 級に合格した。その後日本語力を維持するために毎年日本語能力試験を受け続け(f. 学習方法への気づき)，今合格証書を 5 枚も持っている。その他に日本人教師が教える会話中心の塾へ通い(e. 日本語使用)，インターネットで NHK のニュースを聞き(d. 聴解)，日本のドラマを見たり文法や語彙の本を読んだりした(c. 日本語学習)。漢字があるので，読みはかなり早く，基礎も既にあるので単語を増やすのも楽だった(f. 学習方法評価)。その後公費で 3 ヶ月日本へ研修に行く機会があった。これには試験があり[28]，聞く，話すが苦手だったので 2 回も失敗したが，日本人の家庭教師について勉強した(e. 日本語使用)後，3 回目でやっと合格した。日本語をこれほど勉強したのは，公務員は公費で留学するチャンスがある上に，日本語力を身につけるのは自分への投資になると思ったからだ。日本での研修は，犯罪現場に立会い資料収集について学び(e. 日本語使用)，日本人の友だちも何人かでき，休日いっしょに遊んだりした(h. 交流)。親しいつきあいはないが，1999 年の台湾地震の時日本から「大丈夫か？」と電話をもらい，ありがたいと思った。日本から帰ってから，日本語を忘れたくない，もっと聞き取りと会話の力を強化したいという気持ちが強くなった(f. 学習方法への気づき)。今は時々同僚に日本語のことを聞かれたり，日本語のわからない先輩が日本語の文献を読む時に手伝いをすることがある(c. 日本語解説)。ドラマは忙しいので今は見ないが VCD は時々見る。わからないところがあれば何回も

聞くことができる(d. 聴解)。インターネットは，辞書機能以外に専門分野の資料収集(d. 読解)，他には特定のニュースについて日本がどんな見方をしているか，などを知るためのツールとして利用している(b. 社会文化理解)。辞書は日本語で説明をしているもののほうが日本語の表現が学べると思うので，日本語能力試験 1 級に合格した時から日中辞典は使わず日本の国語辞典を使っている(c. 単語学習)，(f. 学習方法への気づき)。掲示板はあまり使わない。前に日本の警視庁にメールで質問をし，返事をもらったことがある(e. 日本語使用)。台湾には観光客が多いため，夜市で日本人観光客が地図を見ているのを見て，道を教えたことがある(e. 日本語使用)。将来また日本へ留学に行きたいので，レベルを維持するためにインターネットで NHK ニュースを聞き，CD に焼き付けて車を運転する時，聞くようにしている(d. 聴解)。日本の最近の情報もわかるし新しい単語も覚えられる(b. 社会文化理解)(c. 単語学習)。

5.3.2. F さん(女)(日系企業勤務　インタビュー(日本語) 2005 年 10 月)

人	物	場
日本留学をした友人，日本人の上司，同僚，友達，顧客	インターネット，辞書，ドラマ，推理小説	日本に留学(日本語学校，専門学校)，日系企業，カラオケ，上司との食事

専科学校を卒業後，日本留学の経験のある知り合いに勧められ日本に留学した。一年日本語学校での日本語学習を経て，ビジネスの専門学校で 2 年間勉強して帰国したが，三年日本にいても日本語はあまり話せなかった(f. 自己評価)。授業は一方的だったし，日本にいても日本人の友だちはあまりいなかった。自分でも日本語が話すのがこわくて，日本人とのコミュニケーションを避けていたようなところがあった。帰国後，家具を作り輸出する日系資本の会社に就職した。日本人の上司が二人，同僚四人が台湾人で，全部日本語が自分より上手な人たちだった。会社に入って，会議や通訳など朝から夜まで，毎日日本語を使う環境だった(e. 日本語使用)。わからない言葉があれば同僚に聞いてコミュニケーションの仕方を覚えていった(c. 日本語学習)。日本に留学していたときにまわりに男性の友人が多かったせいか「すげえ」「メシ」「カネ」といった言葉をたびたび使っていて，上司に注意され，今では適切な言葉遣いもわかるようになった(c. 言語変種理解)。上司の日本人は，年配の人で単身赴任だったため，生活面でもいろいろ面倒を見てあげた。例えば，皆でいっしょに料理をつくって食事をすることもあり，野菜の名前を教えてもらった(c. 単語学習)。また，カラオケへ行っては，日本語の歌をいっしょに歌って歌も覚えた(c. 日本語学習)。この時期に日本語の力が一番伸びたと思う(f. 自己評価)。その後，いくつかの会社を経て現在の人材派遣の日系企業に入った。上司が日本人で，台湾人の同僚が 7 人いる。日系企業の人材の需要を聞き，台湾の人に紹介する。毎日日系企業の顧客を相手にコミュニケーションをするので(e. 日本語使用)，わからない言葉もあるが，最近は直接相

手に聞く(c. 日本語学習)。辞書はいつも携帯している(c. 日本語学習)。インターネットでは専門用語を調べたり(c. 日本語学習)，日本の企業の内容を調べることもある(b. 情報理解)。ドラマも好きで見ている(d. 聴解)，(g. 趣味・娯楽)。今，難しいのは，法律的な知識を知った上で交渉をしたり，どうやって人をほめたり，人材を人に勧めていくかといった日本語だ。同僚の日本人に聞いているが(c. 日本語学習)，まだうまくいかない(f. 自己評価)。日本語力を維持しさらに表現力をつけるために，好きな推理小説をよく読んでいる(d. 読解)，(g. 趣味・娯楽)。日本に留学時代に知り合った台湾人の友だちと時々電話で話す時は日本語になる(e. 日本語使用)。お互いに日本語力をチェックしあう意味もある(f. 自己評価)が，まわりの人に聞かれたくない話をする時に便利なことも理由の一つだ。

5.4. 年長者

5.4.1. Gさん(女)(主婦　インタビュー(日本語) 2004年8月)

人	物	場
同じ学校の先輩・後輩，日本人のクラスメート，銀行の窓口に来た日本人，同僚，戦後日本から引き上げてきた夫，	童謡，テレビ(NHK，相撲)，雑誌(『オール読み物』，『婦人クラブ』)，外来語辞典，小説，レシピ，手紙	幼稚園，公学校，高校の同窓会，日本語の書店(邱永漢，紀伊国屋)，日本への旅行，OB会の食事会

日本統治時代に生まれた(1928年)が，家では台湾語[29]を話していたので，初めて日本語に接したのは幼稚園の時だった。日本の童謡(もしもし亀よ，烏の子，かもめの水兵さん)を覚えた。今聞いたら懐かしい。公学校[30]に入り，その後高校に入った。高校はほとんどが日本人で，台湾人は1クラスに4,5人しかいなかった。その時の高校の80周年記念の校友会が今年日本であり，先輩たちと招かれて行った(e. 日本語使用)。地元に住む卒業生からなる高校のOB会は，今でも月に1回食事会を開いて日本語でおしゃべりをしている(e. 日本語使用)。高校を卒業した年に，戦争が終わり銀行に就職をした。その後中国から役人がきて中国語で仕事をするようになったので，北京からきた先生に一年間中国語を教わり徐々に中国語を話すようになったが，前からいる同僚や友達同士は日本語を使っていた。日本語のほうがすぐ通じるし仲間意識があった(e. 日本語使用)。時折，日本人のお客さんが窓口に来た時も日本語ができる自分が対応した(e. 日本語使用)。その後，高校時代のクラスメートをはじめ，日本人の友達がよく台湾に遊びにきてはいっしょに遊び，こちらも日本へ行くなど，交流関係は今でもずっと続いている(h. 交流)。会った時に撮った写真を送ったり，暑中見舞いを送るなど手紙の交換もしている(h. 交流)。家庭内の日本語使用率も高い。戦後日本から引き上げてきた夫との会話は日本語であり(e. 日本語使用)，その影響で娘も日本語を片言は知っていたが，その後の学習を経て今では日本語が話せ，孫にも日本語を教えている。娘に日本語学習を勧めたのは，私の日本の友達が子供を連れてきた時に，子供どうし日本語でおしゃべりできないとつまらないと思ったし，娘が国際貿易学科で勉

強していたので，日本語学習は就職に役立つと思ったからだ。自分は日本語も台湾語も中国語もぜんぶ中途半端で，流暢に話せないが(f. 自己評価)，言語は役にたつものなので習ってほしいと思った。テレビはNHKのニュースを毎朝見る(b. 社会文化理解)。相撲の好きな夫につきあって家中で相撲を見る(g. 趣味・娯楽)。雑誌は，『オール読み物』と『婦人クラブ』を前にとっていた(g. 趣味・娯楽)。時折，日本語の本が置いてある邱永漢書店や紀伊國屋に行って，おもしろそうな本があれば買う。小説もよく読む(g. 趣味・娯楽)。最近は外来語がたくさんあってわからないので(f. 自己評価)外来語辞典を買って調べている(c. 単語学習)。『婦人クラブ』にレシピが付録としてついていて，たまにそれを見て料理を作る(g. 趣味. 娯楽)が，時々知らない野菜の名前が出てきて(f. 自己評価)，旅行で日本へ行った時スーパーで確認したり友達に聞いたりする(c. 単語学習)。旅行が夫婦共通の趣味で，日本へは数回旅行をしている(g. 趣味・娯楽)。

5.4.2. Hさん(男)(無職　インタビュー(日本語) 2004年8月)

人	物	場
中学の時のクラスメート，妻，日本語教育を受けた世代の人たち，英語の先生，娘	テレビ(のど自慢，NHK ニュース，相撲)，雑誌(『文芸春秋』，『諸君』)，本，年賀状，手紙，	日本への旅行，日本語の書店，老人大学

1924年生まれなので，公学校6年，高等科2年，高校5年と合計13年日本語で教育を受け(c. 日本語学習)，大学に入るまでの2年間，公学校の教師も勤めた。ちょうど大学に入った年に終戦となり，その後は中国語をゼロから学びながら学業を続けた。戦後，日本語は政府によって全面的に禁止されるが，友人と話す時は日本語だった(e. 日本語使用)。仕事で日本語を使う機会は全くなかったため，日本語を使うのはもっぱら日本語教育を受けた世代の人々と話す時で，昭和 2 年生まれの妻とも台湾語と日本語をおりまぜて話す(e. 日本語使用)。高校時代のクラスメートは大部分が日本人で，台湾人は1割程度しかいなかった。終戦後日本へ引き上げた日本人のクラスメートとは今でも年賀状，手紙のやりとりをしていて(e. 日本語使用)，そのうち頻繁に連絡をとりあっている友人が4人いる(h. 交流)。本が好きなので，台湾で買えない本を買って送ってもらい，わからない外来語を手紙で聞くこともある(c. 単語学習)。テレビを見ていると，最近わからない外来語がたくさん使われていて困る(f. 自己評価)。今老人大学[31]で英語を習っているが，英語を教える先生も同じ世代の人なので，日本語を織り交ぜて説明をしてくれ，外来語も時々解説してくれる(c. 単語学習)。70歳で引退してからこれまで11年間は，興味のある日本語の本を読んで(b. 社会文化理解)，(g. 趣味・娯楽)，中国語で本を書いている(g. 趣味・娯楽)。日本語で読むのは問題ないが書くことはできない[32](f. 自己評価)。これらの本は日本の軍人，政治家，宗教家などの人物伝が中心で，執筆した本は全部で18冊になった。1冊を執筆するのに日本語の参考図書を8～10冊読み，完成させるまで8ヶ月程度費やすが，製本は毎回

10 冊ほどである。自分が読書し思索をした結果を生きた証として残すために書いているだけなので，家族や本が好きな人に配る。『文芸春秋』は毎月購読している(g. 趣味・娯楽)。時折，友人が日本の新聞の切抜きを送ってくれるので日本の事情もよく知っている(b. 社会文化理解)。娘が日本語学科に入ったが，学生時代はわからないことがあれば教えた(c. 日本語解説)。昨年の5月，娘が日本へ出張した際にいっしょに日本へ行き，奈良に住む高校時代のクラスメートとの再会をはたした(h. 交流)。

5.5. 年少者

5.5.1. Iちゃん(女)(小学校3年生　母親にインタビュー(日本語) 2004年)

人	物	場
母，日本の祖母，父方の祖父母，親戚，国際結婚の家庭の子供，書道の先生，日本の友達，補習校の友達	本(読み聞かせ)，本，テレビ(アニメ，「お母さんといっしょ」)，メール，手紙，ビデオ，補習校の宿題	通信教育『チャレンジ』，日本へ帰省，日本の小学校の体験入学，補習校，なでしこ会[33]，書道教室

Iは日本で生まれ2歳まで日本にいた。その後台湾に戻り幼稚園に入り現在小学校3年生である。Iの父親の4人の兄弟のうち3人が日本に留学し，そのうち一人が同じように日本人女性と結婚しているため，いとこたちが集まると日本語を使うことが多い(e. 日本語使用)。Iは台湾にもどって幼稚園に入ってから中国語も話せるようになり，父親とは中国語，日本語教育を受けた祖父母とは日本語で話す(e. 日本語使用)。親が国際結婚の中国語ができない子供のために，時々通訳をすることもある(e. 通訳)。小学校にあがる前は，「なでしこ会」の交流があって，お母さんと子供たちがいっしょに日本語で話をする機会があった(e. 日本語使用)が，小学校に入ってからはその機会がない。そのかわりに補習校[34]ができ，日本語を話す場になっている。補習校では授業が終わると中国語になるが，授業中は日本語で話し(e. 日本語使用)，読み書きを強化するための書く宿題がある(c. 日本語学習)。他に習字と硬筆を習っているが，先生は台湾に長く住んでいる日本人の先生で，言葉や礼儀に厳しいので(e. 日本語使用)，躾にもいいと思って行かせている(b. 社会文化理解)。夏休みになると日本の実家に帰り，3週間ほど日本の小学校に入れる(e. 日本語使用)，(c. 日本語学習)。田舎の学校で1クラスしかないせいか好意的に迎えてくれる。そこで友達もできて，手紙やメールの交換をし(e. 日本語使用)，次の年に行くとまた歓迎してくれて，もう4年ごしの交流が続いている(h. 交流)。日本の祖母とは日本語で話す(e. 日本語使用)。2歳ぐらいの時から『チャレンジ』という添削通信教育を始めた(e. 日本語使用)，(c. 日本語学習)。テレビでは，小さい時「お母さんといっしょ」「日本語で遊ぼう」などを見ていた(d. 聴解)。アニメは中国語の吹き替えになっているが，それが日本のものであることは知っており，主題歌は日本語で歌える(g. 趣味，娯楽)。ビデオを借りて見るときは日本語を選択して見せるようにしている(d. 聴解)。日記は少し書いていたが(e. 日本語使用)，長くは続かなかった。小さい頃は寝る前に読みきかせをしていたが(d. 聴解)，これは語彙

が増えると思う(c. 単語学習)。最近は自分で本を読むようになった(d. 読解)が，図書館が充実していないのが困る。私はIと日本語でしか話さないので(e. 日本語使用)，例えば「幼稚園で何食べてきたの？」と聞いて，語彙が足りず日本語で説明できない場合「うちで食べたことがないもの」と答えたりする。

5.5.2. J君(男)(中学3年生　母親にインタビュー(日本語) 2004年)

人	物	場
母，母親の実家の家族，補習校に通う子供たち	テレビ(「お母さんといっしょ」，ドラマ)，アニメ(「ドラえもん」，宮崎駿)，ゲーム(解説書)，ミニ四駆(説明書)，本(読み聞かせ，ハリーポッター)，日本の学校の教科書	通信教育『チャレンジ』，日本へ帰省，日本の学校の体験入学，補習校，日本語能力試験，日台青少年スカラシップ(交流プログラム)

Jの家庭内言語は多様である。小学校5年生の弟と中国語で話し，父親とは台湾語，母親とは日本語で話す(e. 日本語使用)。父と母は，留学先で知り合ったこともあって今でも英語で話す。祖母は植民地時代小学校の2年生まで，祖父は4年生まで日本語教育を受け，日常的な語彙はたまに日本語を使うこともあるが，Jとは台湾語で話す。同じ補習校に通う母親の友達の子供とは，母親が側にいると日本語で話すが(e. 日本語使用)，子供同士になると中国語になる。昨年日本語能力試験の2級を受けて合格した。昨年日台青少年スカラシップという交流プログラムあり，両言語ができるJが通訳を手伝ったが(e. 通訳)，そういう仕事ができたということで，自分が認めてもらえたと感じ(f. 自己評価)，その後も勉強を熱心にするようになった(a. 学習動機)。その交流プログラムの際，日本に住む台湾籍の子供がアイデンティティに悩んでいるのを聞いて，Jにこのことを聞くと「自分は日本と台湾，アイデンティティが二つあるから悩むことはない」と答えた。日本の学校への体験入学は夏休みを利用して3回行ったが(e. 日本語使用)，(c. 日本語学習)，昨年はSARSで行けず，今年は受験を控えているため日本に一週間しか帰れなかった。私の実家の家族とは日本語で話す(e. 日本語使用)。通信教育『チャレンジ』が日本語の発達に貢献している(c. 日本語学習)。小さい時はゲームの解説書を熱心に読んでゲームをしたり，ミニ四駆の説明書を見ながら車を組み立てて遊んでいた(d. 読解)，(g. 趣味・娯楽)。日本語がわからない友達が解説書を読めず電話をかけてくると，教えてあげていた(c. 日本語解説)。テレビでは，「ドラえもん」を吹き替えで中国語のまま見ていたが，宮崎駿のアニメは日本語を聞ける(d. 聴解)ので，日本語学習に役立った(c. 日本語学習)。ドラマ「ビーチボーイズ」は私もいっしょに見た(d. 聴解)。小さい頃よく読みきかせをしていたせいか(d. 聴解)本はよく読む。ハリーポッターなど冒険小説が好きだ(d. 読解)，(g. 趣味・娯楽)。子供の言語発達には，母親の言葉が重要なので，単語をたくさん使い修飾語もたくさん使った文で言うのがいいようだ。しかし，会話はふだん話しているからあまり問題ないが，日本語

の裏に潜む文化的なものとか，内容のあるものを理解させるのは難しい。補習校では教科書を中心に国語や道徳の教科書を読んでいるが(b. 社会文化理解)(c. 日本語学習)，日本の歴史とか今の日本社会について，海外で文化的背景を理解するのは難しい(f. 文化理解評価)。例えば，テレビで時代劇を見ていても，なぜちょんまげをしているのか，刀をどうやってさすのかなど説明はできても，説明しただけではわからないところも多い。環境問題とか，障害者の話など，短くても心に訴え，内容のある読み物に日本語でふれさせるようにしたいが，そういった副読本がないので困っている。

6. 分析

6.1. グループ別分析

5つのグループの学習者が使用する学習リソースを比べると，年齢や関心，学習目的の違いによって異なる傾向が見られる。

まず，高校生グループ，大学生グループとも，アニメ，漫画，ドラマ，ゲーム，インターネットなどのリソースを利用したサイト情報との接触が圧倒的に多い。大学生になると，これに加えて，メールやチャット，掲示板，旅行や大学の交流プログラムといった場のリソースを介した言語使用の機会がある。非専攻の学生のリソースに比べると，日本語学科の学生は授業をはじめ，人，モノ，場の各種リソースが飛躍的に増える。調査ではこの他に大学の中国語センターで中国語を学んでいる日本人留学生との接触，日本人観光客の多いホテルでのアルバイト，スピーチコンテストへの参加など場のリソース利用の例があった。

一方，社会人にとって日本語は，趣味で学習するという人を除けば本稿で述べた事例のように，仕事のチャンス，公費による研修，昇進に結びつくため学習動機が高い。また，仕事で日本語を使う場合は，実際の仕事，同僚や仕事上の顧客とのつきあいなど場のリソースとの接触が増える。仕事上リソースとの接触がない場合は，塾や日本語能力試験，プロフィシエンシー試験といったリソース，それに関連した人的リソース(塾の教師)や物的リソース(参考書，問題集)の利用が増える。一定のレベルに達した日本語維持のためのリソースとして，趣味や情報収集を兼ねた読書やニュース，新聞の利用があるが，Eさんのように日本語能力試験を受け続けるという例もいる。

年長者においては，特に本稿で紹介した二人は高校まで日本語による教育を受けており，日本語による会話に不自由がないため，新たに日本語を学習するためのリソース利用はない。しかし日常生活に欠かせないテレビや本，趣味の雑誌から今でも旺盛に社会文化理解を進めており，その中で出会う新しい外来語や見慣れない単語に関しては，外来語辞典で調べたり，日本人の友人に聞いたり旅行で日本へ行った時に実物を確かめたりしている。また，同窓会や旅行，手紙といったリソースを通して日本の旧友との息の長い交流が続いている。通信手段として手紙や年賀状の利用はあるが，インターネットの利用はほとんど

みられない。同世代の台湾人同士で日本語使用をする場面も少なくない。

年少者グループは，インタビュー対象者が母親であること，アイデンティティとの関わりを持ち，二言語併用能力としての日本語能力が期待されている点で，他の 4 つのグループと学習目的が異なる。しかし，日本語学習においてゲームやアニメ，漫画，日本語能力試験をリソースとして使っている点では，高校生や大学生のリソース利用と共通する部分があった。リソース利用で異なるのは，母親の親族や補習校を含めた日本人コミュニティという場のリソースで日本語使用機会をもっていることが挙げられる。また，発達段階を考慮に入れた日本語学習，読み書きの能力獲得，そのための知識，社会文化理解のために日本の教科書や通信教育の教材など物的リソースの利用，礼儀や躾を教えるために書道教室といった物的リソースの利用がある。さらに二言語併用話者であることで，小さい頃から他の人のために通訳をする機会があること，寝る前に母親による物語の読み聞かせがある。

6.2. 相互作用分析

次に学習リソースとの相互作用を項目ごとにまとめる。

a. 好奇心，興味，関心，学習動機の産出

A さん，B さん，C さん，G さんの娘さんの事例は，台湾の若者のまわりに学習動機に影響を与える人的リソースが多いことを教えてくれる。例えば，わからないことがあれば気軽に教えてもらえる日本語世代の祖父母をはじめ，既に日本語学習を始めている兄弟や両親，またいっしょにゲームや漫画を楽しむ兄弟姉妹がおり，こうした人的リソースの存在や，人的リソースが有する物的リソースが，若者の日本語学習の動機に少なからぬ影響を与えている。

また，小さい頃から日本の漫画，ドラマ，ゲーム，アニメに接する環境の中で育ち，その内容に興味をもったり翻訳できない擬態語の文字を漫画で見たり，意味がわからなくても日本語を身近で聞いた経験から，日本語に好奇心や興味をもつようになるというケースが多い。こうした学習者は筆者の周りにも数多く存在し，時折彼らの経験を聞くことがあるが，それによれば，最初の興味はアニメやドラマがきっかけだが，その後さまざまなリソースを介して興味，関心が生まれるようになると言う。例えば，アニメをきっかけに日本語による CD のドラマを聞くようになった例では，アニメの多重放送で日本語を聞いて中国語と違った抑揚をもつ日本語に興味をもつようになる→そのうち特定の声優の声や話し方が好きになる→アニメ番組の後ろに出てくる声優の名前を覚えインターネットで検索する→web 上で漫画をドラマ化したものを聞き，発売される CD の宣伝を見て CD を買うようになる→画像がないため，一生懸命会話やナレーションを聞くようになる，と言う。また，ドラマから日本語学習につながる例では，ドラマがおもしろいと思う→テーマソングと歌手が好きになる→この歌手の歌う歌をもっと聴きたいから CD を買う→歌を歌いたいから CD についている歌詞を読めるようになりたいと思う→歌の意味を知りたいから教科書のロー

マ字を頼りに，CD を聞きながらひらがなを覚えるようになる→コンサートに行く→もっとこの歌手のことを知りたいからホームページを見る→それで本格的に日本語の学習をするようになった，というケースもある。さまざまな学習リソースとの接触は，このように日本語への興味，学習動機を生み出している。

b. 日本のモノ，人，コトについて情報，社会文化理解

日本語がわからないレベルでは，翻訳，字幕，吹き替えに頼りながらも，アニメや漫画，小説といった物的リソースに触れることが，日本の社会文化事情を理解する機会となっている。A さんの事例では，「ちびまるこ」のアニメを見て食卓に皿が並ぶ様子が台湾と違うと気づき，B さんはインターネットを介して日本の伝統文化についての理解を深めている。また，C さんは漫画『島耕作』を読んで日本のサラリーマン社会について理解を深め，友人の話や日本の製品からも，日本のモノ作り文化について自分なりの理解を形成している。インタビューでは，これ以外にも若者を中心に，映像の魅力を持つドラマやアニメが日本の生活文化理解に役立っている例に多く出会った。しかし，文化と呼ばれる概念は，こうした生活文化から日本人の精神性，作品に表象される世界まで幅広く，その解釈も多元的である。J 君の母親が日本の教科書にある日本の文化，歴史の知識を教えることは難しいと述べているように，日本の社会事情や歴史の知識を知った上で理解する文化は，テレビやインターネットによる表層的な情報からは理解されにくい。しかも，メディアや特定のインターネットサイトを介して得られた情報には偏りが多い。筆者が授業で大学生たちに「私が日本について知っていること」と題したテーマで話をさせた時に，話題性のある事件から発展した一面的な情報，ステレオタイプ化した見方が目立ち，驚いたことがある。情報源を聞くと，ほとんどがインターネット，テレビ，新聞であった。巨大な資本が投じられて流される情報や商品化された漫画やドラマとの接触は，一面的，表層的な社会文化理解にとどまる恐れがあり，注意を要する。一方，年長者や一定の日本語レベルに達した学習者は，日本語を介した情報理解が可能であり，個人の趣味や関心から読む本や新聞，ニュース，また知り合いの日本人とのつきあいの中から，社会文化理解につながる情報を得ている。

c. 文字，単語，文法理解，日本語全般の学習

B さんの事例は，授業を受けていなくても興味があれば，市販の教科書や身の回りにいる人的リソースを頼りに，文字の学習を行うことができることを教えてくれる。また CD，ゲーム，ドラマ，漫画などを介して，文字だけではなく，単語，文法も学習できることがわかった。特に単語は，わからなければ人に聞けるし，辞書を見れば答えがみつかるので，比較的容易に自己学習が進められる。さらに若者に人気のあるドラマにおいては，映像のある素材で日本語の単語や言い回しを理解することができるし，字幕がついていれば，中国語と対照しながら単語や文法を学習できる。また，B さん，D さん，E さんのように，友

達にわからないところを聞かれて教えるケースもあるが，教えるという行為は日本語の構造を再認識し復習する機会になることから，日本語学習の機会になっていると言える。さらに，実際の言語使用場面やテレビ，インターネットで触れる日本語は，教科書とは違う文体や話し方，方言など言語の多様性に気づく貴重なリソースとなっている。年少者調査の他の例では，母親が小学生の息子に男言葉を身につけさせるために，日本人男性がコーチをつとめるサッカーチームに入れているという例があった。多様なリソースは，多様な言語使用の実態を理解し学習するのに役立つ。

このように教室以外でも文字や文法，言語の多様性などさまざまな日本語学習が可能であることがわかったが，このことは言語の学習に教師が全く不要であることを意味するわけではない。言語構造の学習や技能を身につけるために必要な文型や単語の学習においては，ドラマやアニメ，漫画といった物的リソースによる学習例が少なく，これらの学習はむしろ，D さん，E さんの例にあるように，授業において教師によって導入され，その学習を補助する形で物的，人的リソースが使われていた。I ちゃん，J 君の補習校における読み書きの学習も同様である。また A さんはゲームでカタカナを見ていても，教室でひらがな，カタカナを覚えることを強制されなければ，日本語の文字を知り，インターネットでキーワードを日本語で入力することはできなかっただろうし，課題やクイズがあるから家で一生懸命練習をした，という学習者の声もよく聞く。言語や言語知識を理解し体系的に学ぶこと，学習の強化という機能において，明示的な知識を与え学習の方向性を示すことのできる教師という人的リソースの役割は大きい。

d. 聴解，読解など受容技能の練習になる行為

さまざまな物的リソースの利用は，学習者が聴解，読解など受容技能を伸ばす手段となっている。例えば，読解ではインターネットを使った新聞やサイト情報，ゲームの攻略本，解説書，小説があるが，台湾の学習者の場合，漢字の意味がわかるので，日本語の既習度が低い学習者でも，ある程度の読解が可能である。例えば A さんは，まだ日本語を学習していない段階で，漢字とゲームの知識を頼りに，攻略本を類推しながら読んでいたし，インターネット情報も，写真やその他の情報を頼りに類推しながら読んでいるが，これに似たケースにはインタビューで数多くであった。インターネットのサイト情報は絵や写真情報が多いため，日本語力が低くても利用されやすいようだ。これらの物的リソースを効果的に生かせば，読解の技能の訓練が容易になることが予想される。一方，聴解は文字情報に頼ることができない分，読解に比べると困難なところがあるが，B さん，D さん，E さん，F さんは，ドラマやアニメ，CD ドラマ，ニュース，インターネットの音声付ニュースを利用していた。インタビューでは他に，字幕を隠してドラマを視聴する，朝起きたら歯を磨きながら NHK やケーブルのチャンネルで 10 分でも日本語を聞くようにしている，などの例があった。これらは，興味や日本語のレベルの違いに応じて，学習者が自由に利用できるため，個のレベルの豊富な情報資源，社会文化理解に役立つインプットになっていると同

時に，日本語の言語処理を通じて行う読解，聴解技能を伸ばす有用な学習手段となっている。

e. 言語使用，通訳，日本語を手段として使う行動

チャット，掲示板，メールなどネットを介した日本語使用，現実のコミュニケーション，通訳における日本語使用は，いずれも人間関係やコミュニケーションの目的をもつ社会的状況を持ち，言語使用をすることで何かが達成されるため達成感も大きい。D さんは，日本の大学生との共同実習という場のリソースに参加することにより，掲示板やチャットを介したコミュニケーションを体験し，日本の大学生が台湾に来てからは，共同実習を通して実際のコミュニケーションを体験している。F さんは，日本に滞在した 3 年より，台湾で仕事をするほうが日本語を使用する機会が多かったと述べている。このように，コミュニケーションの目的を持つ場のリソースを利用すれば，海外においても言語使用の機会は少なくないと言える。I ちゃん，G 君の通訳の機会もそうだが，E さんの例にあったように，台湾に来る日本人観光客と話をする機会もある。また，B さん，D さん，F さん，G さん，H さんの事例に，友人や姉妹など日本語を知っている人間の間で日本語を使用する話があったが，台湾人同士による日本語使用は，人に知られたくない情報を語る便利さを有し，連帯感を生み出す機会にもなっているようだ。一方，C さん，D さん，E さん，G さんの事例にあったように，研修であれ，旅行であれ，日本へ行くという場のリソースは貴重な言語使用，自己評価，社会文化理解の機会になっている。ちなみに今回のインタビュー調査に先立ち行われたアンケート調査[35]によれば，訪日経験のある人は高校生 16.7%，大学生は 34.7%，学校教育以外で 63.9%と，日本を訪れる人は年齢があがるにつれて多くなるが，金田(2005)[36]によれば，この数値は他の調査国に比べても非常に高く，日台の盛んな往来を裏付ける結果となっている。インタビューの他の事例に，家族で日本に行った時に日本語ができる自分が通訳をつとめる，インターネットでホテルの予約を行う，といった日本語使用の例があった。

f. 能力，理解についての評価，自己評価，学習方法への気づき・評価

一般に能力の評価は，試験によってなされることが多い。例えば，E さんは大学院を卒業する年に日本語能力試験 2 級を受けたが，合格できなかったことで，日本語能力の評価を知らされた。その後は，日本語能力試験や資格試験などのリソースが，学習目標の目安となると同時に，自己評価の機会になっている。しかし自己評価は試験以外の場でも起こり得る。例えば，C さんのように現状の言語レベル以上の言語接触を経験して挫折感を感じる場合，D さんのように日本人大学生との会話で自身の日本語能力に不安を感じるような場合，がある。その一方で，D さんのように劇の発表で喝采を受ける例や，J 君のように通訳をしたり，まわりの人に質問をされた時に，解説したり教えてあげることで人に感謝され，自己の有能性を感じられるような例もある。挫折感にしても達成感にしても，これら自己評

価は，いずれも後に続く学習に影響を与えるという意味で重要である。また，日本へ短期研修にいった E さんが，帰国後聞き取りと会話を強化したいと思うようになった例や，日本語能力試験 1 級に合格してから国語辞典を使うようになった例は，自己評価が学習方法の変化に結びついたケースである。

一方，年長者グループの自己評価は複雑である。H さんは精力的に日本の人物伝や『文芸春秋』を読みこなすが日本語で書くことができないと述べ，G さんも日本語を流暢に話し，日本の友人たちとの交流も続いているにも関わらず，台湾語，北京語，日本語いずれも完璧ではないと自己評価をしている。日本統治時代は母語である台湾語使用が家庭内に限られ，戦後は日本語が禁止され北京語の使用を余儀なくされるなど，一貫した言語学習を続けることができなかったことが，こうした年長者の自己評価に影響を与えていると考えられる。こうした年長者の自己評価は外来語の学習を除けば，自身の新たな日本語学習につながることは少ないが，自分の知っている日本語を教えたり，日本語学習を肯定視する態度が，次世代の日本語学習に影響を与えていると思われる。

g. 好き，楽しいから行う行為，趣味，娯楽

ゲームやカラオケ，歌，読書などは，外国語であっても自分にとって興味があるものであれば十分楽しめ，しかもそれが意図しない学習効果に結びつく場合が多い。A さんはゲームが好きになり，漢字を頼りに攻略本を読みながらゲームを進めていくうちにカタカナの理解を容易にした。C さんは，好きな漫画を読むことが日本の社会文化理解に役立っており，歌を歌うことも単語学習に役立っている。F さんは同僚とカラオケに行ったり，いっしょにご飯を食べることで，野菜の単語を覚えたりその後の日本語学習に影響を与えたと思われる人間関係を築いていった。また G さんは料理雑誌を見ながら料理を作ることで，見慣れない単語に出会っている。今回の調査では他に，好きな関西出身のアイドルのサイトをいつも見ていて関西弁が理解できるようになったとか，好きな歌手の CD をたくさん聞き，歌の意味を理解しながら文字や文法を覚えた，などの事例があった。いずれにしても好きで行う行為は，言葉の学習を容易にするだけではなく，自身の世界を広げるのに役立っていると言える。

h. 人との出会い，交流，ネットワークの構築

言語教育の目標が，ネウストプニー(1995)の述べる，異なる文化背景の人々との相互行動だとすれば，特に人的リソース，場のリソースは多くの人との出会いを可能にする有効なリソースだと言える。調査の他の例でも，わからないところを教えてくれる学習の協力者や言語交換の相手と知り合えた，といった事例があったが，こうした人々との出会いは，さまざまな交流や相互行動に発展する可能性を秘めているという点で，かけがえのない人間関係を築いていると言える。E さんに地震の時に安否を気遣ってくれる日本の友人がいたというのは，どれほど外国人に対する心の距離を縮めてくれたことだろう。とかく相手が

外国語話者ということだけで，人は容易に心の壁を作りやすく，メディアによる一方的な情報でも相手に対する固定観念を生みやすい。そうなれば相互行動もできにくい。年長者Gさん，Hさんと昔のクラスメートとの交流は，植民地で差別的な教育がなされたとは言え，同じ空間，時間をともに学んだ仲間の絆は深く，友人が単に学習を手助けする人的リソースにとどまらない貴重な財産となっていることを教えてくれる。同様の事例は，年少者グループIちゃんの日本の小学校への体験留学で生まれた子供たち同士の交流，Dさんの日本の大学生との共同実習後の交流にも見られる。

7. 教育への示唆

以上述べたように，学習者は人，モノ，場の学習リソースとの接触を通してさまざまな相互作用を果たし，個々の学びを形成していることがわかった。教師はこれらの知見をどのように教育に生かすことができるだろうか。

学習者の学習目的や学習機関の違いにより教育内容は異なるが，教師はまず，学習リソースとの接触が豊かな学習の機会になっている現実を理解する必要がある。教師は教材を熟知し専門的に学習のデザインをしているように見えるが，それらが学習者の学習に役立っているとは限らない。学習者は何も知らない存在で，教師が授業で知識や技能を教えることで学習が成立するのだと考える学習観から我々は解放されなければならない。学習者は自らの興味と関心から，生活の中にある環境と能動的に相互交渉を進めているのだ。

しかし，学習リソースによる学習がどれほど豊かなものであっても，授業の位置づけが否定されるものではない。逆に授業と教師に求められる役割はますます明確になったとも言える。インタビューの中では，Dさん，Eさんが高校，大学の第二外国語の授業で，学習したものが少ないと述べているが，一方で同じDさん，Eさんの事例に，教師が課題を出したり，一定のレベルを提示し，学習者にそのレベルに合うように自己学習を求める他の授業の例も紹介されている。教師が何をどう指示するかによって，学習者の学習が深められ，広がりをもつものになり得るかどうかが決まる。教師は授業において，学習者が何をどこまでするべきか，学習の道筋を明確に示さなければならない。その上で，学習リソースを有効に活用するように学習者に教えることである。例えば，インターネットで資料を探させたり，CDを自宅学習にして簡単なクイズをするというやり方は，これまでもやられているが，今後も積極的に取り入れるべきである。また，既に述べたように，台湾の学習者の場合，日本語の既習度が高くなくても，漢字や写真を手がかりに文章を類推しながら読んでいる状況があることから，例えば，初級のクラスで文字や簡単な文法を教え，辞書の引き方を教えたら，早い段階でインターネットのサイトで何かを読み取ってくるような宿題を課すことは可能である。こうした課題は，自律学習に向けた姿勢を養うだけではなく，教師が授業を効率的に進める上でも役にたつ。さらに，リソースが複合的に関係する構造をもつ場のリソースを授業に組み込むことは，学習の機会をさらに広げることにつながる。

会議や交流の場における通訳や情報提供も，学習者にとって社会的に自己の有能性を感じられる場のリソース利用であり，奨励していきたい。

最後に，個々の学習リソースへのアクセス，相互作用によって得られたものをより複合的，精緻なものにするために，共同学習としての授業の必要性を挙げたい。既に述べたように，メディアに支配された情報は一面的な見方を生じやすく，自分の関心だけでこれを理解していると独りよがりの解釈に陥りやすい。複数の人間がさまざまな資料をもちより，討論を通じて複眼的な視点を形成していくこと，内容を掘り下げていくことは，授業のような場でこそ可能であろう。

8. 課題

台湾の日本語学習者のまわりにどのような学習リソースがあり，どのような相互作用が生まれているのかを見てきた。学習リソースは，歴史的，社会的，文化的な背景をもつが，これらの多様な学習リソースとの接触は，実に多様な学習機会を生み出していることがわかった。言葉の学習に限らず，学習者たちのまわりには仕事や勉学，人や娯楽を通して日本語を使う世界が存在しており，その世界との相互作用が個々の学びを助け，人を豊かにしている。この豊かな学びを形成しうるリソースを教育に生かさない手はない。今後は，これらのリソース利用をどのように教育，学習支援に位置づけていくべきか，具体的な方法を探り，検証していかなければならない。その場合，教師がどのような役割を果たしていくべきかを，合わせて見ていく必要がある。

尚，本調査では学習者の具体的な学習リソース利用の一端を見ることができたが，何をどのように利用して学習をしているのか，そこに教師がどのように関わっているのか，に関しては，さらに継続調査をしていく必要があると感じている。その際，調査分析の方法論については再考を要する。まず，学習とは何かを再定義し，学習行動の細分化をする必要がある。その上で特定の学習行動について詳しく調査分析をしていかなければならない。また，学習行動を触発する学習リソースと個々の学習者要因の関係も，詳しく調査分析していく必要がある。

注

[1] 1895年～1945年の日本の植民地統治時代に初中等教育，高等教育を受け，一部の人は現在でも日本語を流暢に話す。

[2] 父親が台湾籍，母親が日本籍をもつ家庭の，小学校から中学校までの生徒。生徒たちは，台湾の小中学校に通っており，家庭内では基本的に日本語と中国語の二言語を併用している。

[3] 本調査でとりあげる年少者グループは母親が日本人である点，年長者グループは植民地時代に学校教育を受けたという点で，他の調査グループと異なる。

[4] 田中・斉藤(1993)p. 45

[5] 本稿では，人とモノの存在するコミュニケーション空間，システムという意味で「社会

的リソース」より「場のリソース」の名称が適当だと考え，この名称を採用する。

[6] 木下は「教室コミュニティという考え方からすれば，先生からだけでなく，同級生からも学べる。自分より劣るように見える同級生からも学ぶものがあるという態度の育成も重要である。」(p. 21)と述べている。

[7] ビジネスや学術交流など実質行動を指す。

[8] ネウストプニーは，相互行動に必要な社会及び文化についての知識として，日常生活，家庭，交友，教育，職業，公的生活，サービス領域を挙げている。(p. 109)

[9] 反日蜂起した台湾人によって日本人教師が殺された芝山巌事件(1896)や，日本統治に抵抗した原住民高砂族が蜂起して戦った霧社事件(1930)など。

[10] 黄(1995)p. 96

[11] 1947年台北市で闇タバコを販売していた老婆の射殺をきっかけに起こった国民党政府や軍に対する民衆の抗議行動。

[12] 酒井(2001)は，こうした人々を「日本語人」と呼んでいるが(p. 211)，親日と言われるのは，戦後の支配者である国民党政府に対する屈折した思いで日本を懐かしむのであって，植民地統治を肯定するものではないとも述べている。(p. 203)

[13] 財団法人交流協会(2001)

[14] 中華民国交通部観光局統計資料 http://202. 39. 225. 136/indexc. asp

[15] 台湾で発行されている「聯合報」(2005年11月22日)

[16] 浜田らは学習リソースという言葉を使っていないが，浜田らがとりあげた学習環境は本稿の学習リソースの定義と重なるところが大きい。

[17] 佐伯は，「学習者個人が頭の中に特定のまとまりをもった知識や技能を獲得すること」という従来の学習観に対して，学習とは，知識も感情もある「わたし」が変わり，具体的な学習への取り組みが変わることであり，自分探し，アイデンティティの形成である，とする新しい学習観を提唱している。(pp. 8-9)

[18] 佐々木(2002)は，日本事情としての「文化」として日常生活，一般教養，専門知識，大衆文化を含めた所産，知識としての文化及び伝統文化，精神文化を挙げている。

[19] 映画，コンピューターを利用した社会文化理解，日本語交流については，吉村・宮副(2005)，宮副・吉村(2005)に詳しい。

[20] まわりの人に対して母語による日本語の文法や単語の解説を行うことも自身の学習の確認，復習となるという意味でcに分類する。

[21] 結果的に社会文化理解を伴うことが多いが，外国語としての日本語の情報処理を伴いつつ技能の習得を目指すような行為の場合，この分類に入れ，母語，日本語に関わらず純粋に情報理解を目的としている行為はbに分類する。但し，bとdを厳密に区別することは難しい。

[22] 学習としての位置づけではないが，結果的に意図しない学習行動につながることが多い。

[23] 調査では筆者を含めた10名の調査者が，2004年7月から2005年12月にかけて，年少者(保護者)15名，高校生25名，大学生38名(うち日本語専攻22名，非専攻(日本語以外の専攻)16名)，社会人24名，年長者25名，合計127名にインタビューを実施した。インタビューの時間は30分から1時間。本稿では，このうち比較的リソースとの接触が多い学習者を中心に取り上げた。

[24] 最初のインタビューの後，詳細を聞く必要がある場合は追加インタビューを行った。

[25] この学校では選択制の第二外国語として週に2時間，日本語の授業がある。普通高校は受験への影響を考慮して第二外国語の授業は通常2時間が多いが，職業高校で日本語を専門とする学校では週に20時間あるところもある。

[26] ティーチング・アシスタント。この学校では日本籍の留学生，台湾籍の上級生がアルバイトでTAとして後輩の質問を受けつけている。

[27] 本稿では，地域方言，社会方言，レジスター，文体の違いなど一定の特徴をもつ言語ス

タイルを言語変種という名称で用いる。

[28] 財団法人語言訓練測験中心(http://www.lttc.ntu.edu.tw/)で行う外語能力試験(Foreign Language Proficiency Test)

[29] 閩南語

[30] 日本人は小学校，台湾人は一部の人を除いて公学校，原住民は蕃童教育所と，分けられていた。

[31] 高雄市が運営する施設で，年長者が無料で健康相談を受けたり，語学や絵画などを習うことができる。

[32] 筆者がインタビューで何回かお会いしていた際，丁重な手紙を1,2度いただいたことがあるが，日本語による手紙は，教育を受けた日本人となんらかわるところがなかった。ここでは日本語で本を執筆するのは難しいという意味だと思われる。

[33] 台北を中心とした，台湾人男性と結婚した日本人女性の会で，現在150名以上の会員がいる。

[34] 文科省から派遣のある正式な補習校と違い，「なでしこ会」のメンバーがボランティアで週末に授業を運営している。

[35] 国立国語研究所(2005)

[36] 金田(2005)，p.24

参考文献

稲垣佳世子・波多野誼余夫(1989)『人はいかに学ぶか』中公新書

石黒広昭(2004)「学習活動の理解と変革にむけて－学習概念の社会文化的拡張－」『社会文化的アプローチの実際』北大路書房，pp.2-32

小河原義朗・笠井淳子・石井恵理子(2005)「学習者は何をどのように用いて学習しているのか？－日本語教育の学習環境と学習手段に関する調査研究－」『韓国日本学界第70回国際学術大会Proceedings』，pp.486-492

小河原義朗・金田智子・笠井淳子(2005)「海外における日本語学習者の学習環境と学習手段」『日本語科学』18，pp.111-123，国立国語研究所

金田智子(2005)「学習者の学び方から学ぶ－日本語教育の学習環境と学習手段に関する調査研究もとに」『台湾日本語文学会 2005 年度日本語文学術研討会会議手冊』，pp.22-29

国際交流基金日本語国際センター(2003)
(http://www.jpf.go.jp/j/japan_j/oversea/kunibetsu/2004/index.html)

国立国語研究所(2003)『日本語教育の学習手段と学習環境に関する調査研究—タイ(バンコック)アンケート調査集計結果報告書』

国立国語研究所(2004)『日本語教育の学習手段と学習環境に関する調査研究—韓国アンケート調査集計結果報告書』

国立国語研究所(2005)『日本語教育の学習手段と学習環境に関する調査研究—台湾アンケート調査集計結果報告書』

小西正恵(1998)「3.動機・態度」『第二言語としての日本語学習及び英語学習の個別性要因に関する基礎研究』平成8年度～平成9年度科学研究費補助金基盤研究(C)研究成果報告書
佐伯胖(1995a)「文化的実践への参加としての学習」『学びへの誘い』, pp. 1-48, 東京大学出版会
(1995b)『学びの構造』東洋館出版社
(1995c)『「学ぶ」ということの意味』岩波書店
酒井亨(2001)『台湾入門』日中出版
佐々木倫子(2002)「日本語教育と「文化」概念」『21世紀の「日本事情」』第2号, pp. 146-155, くろしお出版
財団法人交流協会(2001)『台湾の経済事情』
田中望・斉藤里美(1993)『日本語教育の理論と実際』大修館書店
寺村由佳・佐久間治夫(1995)「事例研究：人的リソースの利用状況―中国帰国生徒の場合―」『中国帰国者定着促進センター紀要』, pp. 128-141
トムソン木下千尋(1997)「海外の日本語教育におけるリソースの活用」『世界の日本語教育』第7号, pp. 17-29, 国際交流基金日本語国際センター
西口光一(1999)「状況的学習論と新しい日本語教育の実践」『日本語教育』100号, pp. 7-18
(2001)「状況的学習論の視点」『日本語教育学を学ぶ人のために』pp. 105-119, 世界思想社
J. V. ネウストプニー(1995)『新しい日本語教育のために』大修館書店
林さと子(1998)「第二言語としての日本語学習及び英語学習の個別性要因に関する基礎研究」平成8年度～平成9年度科学研究費補助金基盤研究(C)研究成果報告書
林正寛(1997)「多言語社会としての台湾」『多言語主義とは何か』pp. 34-47, 藤原書店
浜田麻里(2004)「研究の理論的枠組み」『日本語学習者と環境との相互作用に関する研究』平成 13 年度～平成 15 年度科学研究費補助金基盤研究(C)(2)研究成果報告書, pp. 3-10
文野峯子(2004)「日本語学習者と環境との相互作用に関する研究」平成 13 年度～平成 15 年度科学研究費補助金　基盤研究(C)(2)研究成果報告書
黄宜範(1995)『語言，社会與族群意識』文鶴出版有限公司
宮副ウォン裕子・吉村弓子(2005)「ヴァーチャル教室の「日本の社会・文化」にかかわる意見の調整―日港大学間の電子メール交換活動の実践から―」『日本研究と日本語教育におけるグローバルネットワーク』2, pp. 281-292, 香港日本語教育研究会
吉村弓子・宮副ウォン裕子(2005)「ヴァーチャル教室における日本語交流―電子メール交換授業の進め」『日本研究と日本語教育におけるグローバルネットワーク』2, pp. 172-181, 香港日本語教育研究会

羅暁勤(2005)「学習者のモチベーションを研究する」西口光一編著『文化と歴史の中の学習と学習者』pp. 189-211，凡人社
劉志明・王甫(2002)「中国，台湾における日本語観，日本観の比較」『東アジアにおける日本語観国際センサス』pp. 89-112，国立国語研究所